大学院：教科教育専攻、哲学特論演習

教科専門と授業作り支援

社会科教育・寿　卓三

Ⅰ　受講状況：１回生３名

Ⅱ　アンケートの内容と結果

問１　この授業へのあなたの出席状況

ａ　とてもよかった　３名

問２　この授業に意欲的に取り組みましたか。

ａ　とても意欲的に取り組んだ　１名

ｂ　意欲的に取り組んだ　２名

問３　この講義における寿の学生への対応

ａ　学生の知的好奇心・勉学意欲を引き出すために，講義の中に学生の声をうまく取り入れていた。　３名

問４　この講義において院生の授業作り支援の授業を中心にした展開になったことをどう思いますか。

ａ　とてもよかった　１名

ｃ　どちらとも言えない　２名

問５　授業作りに対する支援は適切なものでしたか。

ａ　とても適切であった　３名

問６　この講義と「社会科教育実践研究」の講義との関連は適切なものでしたか。

ａ　適切な連関性があり，自分の課題を解決するのに有効であった。　１名

ｂ　連関していて、課題を追究する手がかりとなった。　１名

ｃ　連関していたが、それを課題追究に活かすまでにはいたらなかった。　１名

問７　大学院での他の講義との関連についてどう考えますか。

ｃ　どちらとも言えない　１名

ｄ　あまり感じられなかった　２名

問８　授業の内容、レベルは、あなたにとって適切でしたか。

ａ　とても適切であった　１名

ｂ　適切であった　２名

問９　この授業により、自分の考え方が培われたり、得たりするところがありましたか。

ａ　とてもあった　２名

ｂ　あった　１名

問 10　この講義は、大学院の講義として妥当なものでしたか。

ｂ　適切であった　１名

ｃ　どちらとも言えない　２名

問 11　この講義でよかったと思う点、印象に残った点を挙げて下さい。

①哲学という学問への認識がかわった。人が生きていく上での考えられうる可能性を考えて、その中から最良のものを選択したり、その可能性を考えることによって、弱い立場にいたり困っている他者や自分を善い方向へ目を向けさせる、という認識に変わりました。

②社会科教育実践研究でどうしても解決できなかった点をこの講義で解決へのヒントを与えてくれた。

③他の授業では気付くことのできなかった問題点、また考え方に気づくことができた。

問 12　この講義でよくなかったと思う点、改善すべき点を挙げて下さい。

① 実践研究での直接的な支援はありがたかったのですが、個人的にはもっと寿先生の前期のような哲学の講義が受けたかったです。今野先生との別の時間を使っての指導は時間がもったいない気がしました。

　課題の量については、同じ時間にお二人からの指導があれば、課題に対して深く取り組めたかと思います。

②もっとつきはなしてほしかった。本の紹介をしてほしかった。

　課題の量は適切であったと思う。努力すればできる程度であった。

③後期には授業作りを中心に講義を行ったのであるが、できれば哲学の分野を勉強したかった。概念化ということに関しても、そちらの方が多くのないように触れることができ、ためになったのではないかと考える。

課題については適切であった。特に今野先生の次の日ということもあり、効果的であったのではなかろうか。

Ⅲ　講義へのコメント

教育研究科においては、理論研究と授業実践力の育成とが乖離しがちであった大学院教育の在り方を改善すべく、平成 18 年度に専修主任会の下に大学院改革委員会を設置して、本研究科の教育内容、教育方法の改善を進める体制を確立しつつある。また、本研究科の教育目的・目標を明確に定め、複数指導体制や、教育研究指導計画書の作成など研究指導の基準を明確にしつつある。

社会科では、このような動きを受けて、「社会科教育実践研究」の授業において、前期に、社会科教育の先生が中心になって、院生に中学校第２学年の地理の授業の単元構想づくりを行わせた。後期には、授業構想に関する前期の検討を踏まえて、本格的に教材開発と授業づくりに入り、10 月から１月にかけて、指導案の作成と模擬授業を行い、1 月末には、附属中学校における研究授業、そして、附属学校の教員も含めた集団による授業検討と授業研究が展開された。このように、専修の教科教育、教科専門、さらに附属学校の教員の協力体制によって大学院生による単元構想・研究授業が行われることで、多角的な視点と専門性に裏付けられた「授業づくり」が可能となり、本研究科の教育目的である「高度な実践的能力を有する学校教育教員の養成」を実現する体制が実質的に機能する手はずが整備されつつある。

しかし、このような一連の大学及び大学院教育の改革の圧力に対して、私たち一人一人は、その日々の授業をどのように改善しているのだろうか。また、そのような改善の試みは、他の教員の授業改善の試みとどのように関係しているのだろうか。そしてこの一連の改革は学生の教育実践力の向上に有効に機能しているのだろうか。法人化後に、次々と打ち出されてくる様々な改革の試みに辟易しつつも、前向きに教育・研究に取り組むにはどうすればいいのだろうか。私たちは、このような問い（むしろ、いらだちというべきか）を内心で反芻しながら、日々のしのぎをやっているのではなかろうか。

さて、この講義であるが、哲学的概念を院生にも身近で切実な問題に即して考察した前期の講義を継続するつもりであったが、「社会科教育実践研究」の進捗状況が予想外に悪いということを知り、急きょ、この講義でも、授業作りをともに進めることとした。このような変更が院生にとって望ましいものだったかどうかは、正直判断しかねている。というのも、学生たちは一方では、授業作りへのこの授業でのサポートが有意義であったと評価しつつも、他方では、哲学の講義をきちんとやってほしかったという感想を述べているからである。理想としては、寿が、今野先生の授業に参加して、共同で授業作りのサポートを行い、それとは別に哲学の講義を進めればよかったであろう。ただ、現実問題として、時間調整が困難であると同時に、授業者に取って負担が増えることは正直しんどいな～という思いがある。この辺をどのように対応するかは今後に残された課題である。また、他の教科専門との関連性に対して、厳しい評価がくだされているが、これもまた今後考慮すべき課題である。ディプロマ・ポリシーにもとづく有機的で体系的なカリキュラム構築を求められている状況下において、私たちはこのような協働作業をどうすれば組織できるのか。個々人の授業改善の営みを相互に関係させていくことが今必要であるという認識は多くの教員が認識しつつも、個人評価など、法人化後の競争的原理の導入によって、私たち教員自身がますます自閉化傾向を強めつつあるように感じるのは、「管理職」という立場でしか現実をみられなくなってしまった「管理者」寿の偏見であろうか。教壇から、学生に対して、社会のゆがみ、世界のゆがみを説き、その問題をどう解決するかが私たちの課題だとして、自閉して社会事象に無関心な学生の日常を私は批判しているのだが、そのような発言の資格が私にあるのだろうか。